変わる大学入試に向けて，どう備えるか

佐藤雄太郎

■「新テスト」～新しい共通テスト

2013年に「達成度テスト（発展）」の仮称で検討が始まった，大学入試センター試験に代わる新しいタイプの共通テストは，2014年12月の中央教育審議会答申のなかで，「大学入学希望者学力テスト（仮称）」という名称を経て，2017年７月には「大学入学共通テスト」として正式に決定し，2020年度（2021年１月）から実施されます。さまざまな議論を経て，「大学入学共通テスト（以下，共通テスト）」では，記述式と英語４技能評価を導入することで話がまとまっています。

■新しい制度による大学入試の英語

さて，ここから「大学入試の英語」という点に話を絞ります。新しい制度による大学入試の英語は，「読む・聞く・話す・書くの４技能を適切に評価すること」を原則としています（2017年７月13日文部科学省公表「『大学入学共通テスト』実施方針」）。現行の大学入試においては，「大学入試センター試験（以下，センター試験）」を含め，２技能（読む・聞く），あるいは３技能（読む・聞く・書く）で測ることが主流になっていますが，2020年度（2021年度入学者選抜）からは，これらに「話す」を加え，４技能で評価することになります。2021年１月に実施される「共通テスト」も，英語を４技能で評価することになります。ただし，共通テストで実施する場合，50万人近い受験者に対して，一斉実施することが，（現在は）技術的に困難であることから，「民間団体による英語４技能資格・検定試験／テスト（以下，外部試験）」が活用されます。現行の大学入試においても外部試験は活用されており，一般入試で活用する大学も増えています。そうした実績もあって，2020年度からの大学入試では，民間団体のものが活用されます。

外部試験の活用にあたって，現在の入試では，大学それぞれの考えや判断に基づいて活用していますが，“共通試験”となれば，センター試験のように，国が定めるルールが必要です。そのルールとは主に，①外部試験の成績のみを大学に提供（＝英語成績提供システムの構築），②大学入試センター（国）が定めた条件に合致する外部試験を採用する（＝認定試験），③大学への成績提供は「高３生の４月から12月までの２回（事前申請が必要）」とする，ことがあげられます。要するに，“国が認定した外部試験の成績だけを活用する方法を採用し，受験学年である高３生に限って大学に提供できるルール”として定め，「共通テスト」で活用しようというわけです。したがって，「共通テスト」として外部試験を受検する場合は，前述のルールに従って受検しなければならず，例えば，高１や高２に受検したスコア等は，「共通テスト」においては「活用できない」ということになります。

一方，個別入試（各大学が独自に行う入試）でも，４技能で評価することになりますが，「共通テスト」の事情と同じく，現行入試では，独自に４技能試験を作問している大学はほぼ無く，ほとんどが外部試験を活用している状況です。そのため，各大学でも外部試験を活用することが予想さ

読む・聞く・話す・書くの４技能を適切に評価することを原則とする	
大学入学共通テスト	**共通タイプの２技能試験（「読む」「聞く」）** ・大学入試センターが作成する２技能試験（「筆記（リーディング）」，「リスニング」） ・間接評価（発音・アクセント，整序等）を減らす方針 ・リスニングは，「アメリカ英語」のスピーカーとは限らない
	民間資格・検定試験（「読む」「聞く」「書く」「話す」） ・外部試験の成績を大学に提供する制度▶実施主体は民間団体 ・７団体24試験が成績提供として活用される（2018年８月27日現在） ・スコアとＣＥＦＲに対応した段階別表示を大学に提供 ・高３の４～12月に受検した成績結果の２回のみ大学に提出可 ・成績結果の入試利用は事前申請が必要
個別選抜	**各大学が独自に課す民間資格・検定試験** ・共通テスト枠以外で活用する方法（スコア期限，部分利用等は各大学が決める） ・TEAPを利用した入試（早稲田大，上智大，青山学院大，立教大，関西大・・・）
	各大学が独自で作成した試験 ・国公大の２次試験，私大試験

表　2020年度以降の英語大学入試

れますが，ここで注意すべきは，個別入試で行う場合は，必ずしも《「共通テスト」と同じルールではない》という点にあります。つまり，各大学，特に私立大学は，それぞれの「入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシーとも言います）」がありますので，ここは，大学それぞれのルールに基づいて実施されることになります。したがって，「共通テスト」では高３生の成績しか活用できませんが，各大学が課す場合，“高２の成績でもよい”という可能性があります（現行入試においては，成績が２年間有効とする場合が多いです）。外部試験を受検する場合は，「共通テスト」なのか，「個別入試」なのか，いう点に注目しながら，受験に臨む必要がありそうです。

なお，外部試験を活用しない，英語の試験については，いくつか種類があります。「共通テスト」では，外部試験を活用しますが，2023年度までは，現行のセンター試験で行われているような「筆記」（いわゆるセンター英語と言われるもの）と「リスニング」の２技能試験が継続して行われます（問題は，現在と同様に，大学入試センターが作成します）。また，各大学が作成する個別試験（いわゆる国公立２次試験や私大の入試）では，４技能よりも，現行通り，２技能または３技能を測る問題が多くなると予想されます。

したがって，2020年度からの大学入試では，受験する英語試験の種類が増えることになります。例えば，国立大と私立大を併願する受験生は，①共通テスト（２技能試験），②外部試験（国が認定した試験），③国立２次試験，④私大入試と少なくとも４種類を受験しなければなりません。前述の通り，「共通テスト」として外部試験を受検する場合は，高３生のみという制限がありますので，英語については，これまで以上に，計画的に学習を進める必要がありそうです。

■外部試験と大学入試の学習方法は同じなのか

高校３年間で，効率よく学習を進めるといっても，限られた時間の中で行なわなければならず，全てを一気に行うことは難しいと思われます。だからこそ，計画的な学習ということになるのですが，そもそも外部試験と大学入試で求められているものは，同じなのでしょうか。答えは「Ｎｏ」と言えます。その理由の１つとして，外部試験は，そもそも「英語が正しく運用できているかどうか，活用できているかどうか」を測る試験／テストですので，到達レベルが明確に設定されています。一方，大学入試の場合，「選抜」として作られているため，《到達できるか》というよりも，《志望する（自分の）大学が求める学力像にマッチするかどうか》が重視されます。そのため，バランスよく出題されるとは限りません。出題の狙いも大学によって様々です。外部試験の場合，提供する民間団体の出題方針や目的（例えば，留学で使うのか，ビジネス英語の能力を測るのか，など）により，多少異なりますが，４技能をバランスよく測る，という点では，どの試験／テストも共通するところがあります。しかし，大学入試の場合は，前述のように「バランスが良い」とは限りませんので，その点を踏まえて学習に臨む必要があります。

ただし，英語を学習するという点では，現在も新制度になっても変わらないと言えます。また，外部試験も大学入試も，それぞれの対策が必要になるとはいえ，文法や語彙を知識として十分に蓄えるといった，いわゆる「基礎学力」はどの試験

／テストでも共通事項と言えるでしょう。

■外部試験の受験は一通りではない

現在（2018年９月現在），2021年度入試について，国立大学を中心に少しずつ公表されていますが，外部試験の活用については，ほとんどの大学で具体的な公表を行っていません。ただ，国立大学では，「共通テスト」の英語について方針（※１）を示しており，《２技能試験と外部試験の両方を必須として課す》としています。外部試験の活用としては，①出願資格，② CEFR〔セフアール，セファール〕（※２）対照表に基づき，共通テストの英語試験の得点に加算，③①と②の組合せで判定するとしており，①の場合，CEFR のＡ２以上を１つの目安としています。一方，公立大学は，国立大の方針にできるだけ準ずるとあり，《２技能試験と外部試験の両方を課す》場合もありそうです。また，私立大学は，各大学の考え方があるため，「大学それぞれの判断による」としています。

現在の大学入試において，外部試験を活用する大学（一般，推薦，ＡＯ入試のいずれかで外部試験を活用する大学）は，全大学の概ね50％程度です。利活用する大学のうち，概ね70％近くは，３種類以上の資格・検定試験を選択しています。「共通テスト」で採用された外部試験は７団体24試験ですが，大学入試センターも，公表資料のなかで，できるだけ受験生に不利な条件とならないよう，多くの試験を採用するように，としています。もっとも，場所によっては，（会場数の確保等の関係から）受験できる／できない試験があると思います。

しかし，これから考えなければならないことは，外部試験の「受験の仕方」です。というのも，《高３生の４～12月の間に２回だけ提出できる》のは，共通テストの枠内で受検する場合です。現行の入試のように，独自の英語試験の代わりに，外部試験を活用する場合（特に私立大の一般入試）は，高３生の成績とは限らず，高２からの成績が活用できる場合もあり，外部試験については，受験の仕方が複雑になります。そのため，これからは，志望大学によって受験方法が異なるため，それぞれの大学が「どのような受験方法なのか」をよく知ったうえで，受験に臨む必要があります。加えて，国公立の２次試験や私大試験の対策もしなければなりませんので，より計画的な学習が求められると言えます。

■最後に

2020年度からスタートする新制度入試は，まだまだ見えない部分が多いため，不安に思われる方も多いのではないかと思います。東大をはじめ，少しずつですが，各大学が2020年度（2021年度入試）からの入試情報を公表しはじめています。また，学習方法という面では，志望大学によっては，外部試験を受検しなければなりませんが，「共通テスト」の場合，一定のルールに基づいたものですし，共通テストや外部試験以外，国公立２次や私大入試については，これまで通りの学習が求められます。前述の通り，これまでの入試よりも，少しだけ早い準備が必要となりますが，学校の授業と家庭学習の時間を上手く利用して，計画的な学習を進める点では，いままでの入試勉強と何ら変わりありません。正しい情報を得ながら，計画的な学習を心掛けていただければと思います。

（※１） 2018年３月30日「大学入学共通テストの枠組みにおける英語認定試験及び記述式問題の活用に関するガイドライン」
2018年６月12日「大学入学共通テストの枠組みにおける英語認定試験及び記述式問題（国語）の活用にあたっての参考例等について」
（※２） CEFR（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）とは，外国語運用能力等の評価のために，包括的な基盤を提供するものとして，20年以上にわたる研究を経て策定されたものである。

（さとう　ゆうたろう・代々木ゼミナール教育総合研究所所長）